

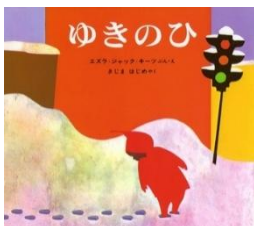
ぶんこだより

子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

10 OCT
2026

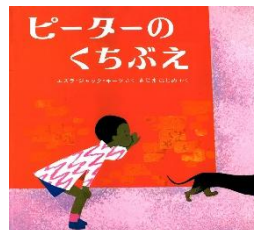
「エズラ・ジャック・キーツ」

子どもたちはもちろん、集まった大人の人たちとも、キーツ（エズラ・ジャック・キーツ）の絵本を楽しんできました。



「ゆきのひ」

（作・画：エズラ・ジャック・キーツ、訳：木島 始／偕成社、1969年）



「ピーターのくちぶえ」

（作・画：エズラ・ジャック・キーツ、訳：木島 始／偕成社、1974年）



「ピーターのいす」

（作・画：エズラ・ジャック・キーツ、訳：木島 始／偕成社、1969年）

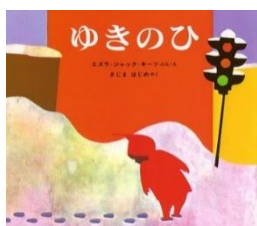
「子どもたちはもちろん、集まった大人の人たちとも」であるのは、たぶん、年代・年齢を超えて、そこに集まった人たちと、主人公、登場人物の声がキーツに届いている、聞こえてくるからであるように思えます。

瀬田貞二が、エズラ・ジャック・キーツの言葉として次のような文章で紹介しています。

「あらゆる者の求めるところは、集まって組む機会です。さあ、体を覆うものを取り、長く閉まっていた戸を開けて、新しい本、すばらしい本、真実で鼓舞してくれる本を、あらゆる子どもたちに与えましょう。あらゆる子どもたちのことを書いた本を、

——背の高いのも低いのも、肥ったのもやせたのも、色の黒いのも白いのも、きれいなのも心の暖かいのも、みんな登場してくる本を。さあ、いらっしやい」

「絵本論 瀬田貞二 子どもの本評論集」(著：瀬田貞二／福音館書店、1985 年)。



「ゆきのひ」には、たった見開き 30 ページに、「雪国」に育った者にとっても、思いつく限りすべての雪のことが描かれています。それは、そんなに雪を知らない子どもたち、大人にとっても、「新しい本、すばらしい本、真実で鼓舞してくれる」絵本です。何よりも、表紙から始まって、見開きの場面ごとに、雪の事が描かれるのです。

しかも、ピーターは、そんな雪の中で、決して立ちどまってないで、雪に驚き、雪と遊び、ピーターの雪の世界は止まるところを知らないのです。いいえ、ピーターが止まっていると雪の方からピーターに仕掛けてくる、そんなキーツの雪の世界、「ゆきのひ」です。

18 歳で、西宮に出てくるまでの「北陸」の田舎の冬は、雪の世界でした。「雪に閉ざされた世界」と言ってもよかった、そんな世界でした。でも、子どもたちは、雪が降るのを待ちこがれ、「初雪」に、振ってくるぼたん雪を、大きな口を開けて大空を見上げました。積もった雪の上をころげ回り、吹きだまりに飛び込む、「赤切れ」「しもやけ」になっても、雪は嫌いにはなりませんでした。「ゆきのひ」は、表紙から 30 ページの見開きすべてで、自然の中で躍動する人間、子どもを言葉は少なくとも「絵」で、描く絵本なのです。



「どこでも、身ひとつで」「楽器」になってしまう「口笛」の世界チャンピオンの対談が、「口笛のはなし」(著：武田裕熙、最相葉月／ミシマ社、2025 年) です。

そんな世界チャンピオンでなくっても、口笛が吹きたくなくなった子どもの絵本が、エズラ・ジャック・キーツの「ピーターのくちぶえ」です。



くちぶえが聞こえてきて、ピーターも吹きたくなりましたが吹けません、音が出ません。吹きたくなって、それが止められないのがピーターです。ピーターでなくっても、好奇心で生きているのが、子どもというものであってみれば、そんな子どもを、存分

に描くのがキーツなのです。もちろん、そうして描かれるピーターが、その子どもらしさを存分に発揮して、くちぶえに挑み続けます。そんな様子の子どもらしさの一つ一つが、見開きのページで、決して同じではなく、子どもらしい発見・気づきで描かれるのです。そんな「子どもらしさ」で描かれるキーツの絵は、細かく描かれている訳ではありませんが、大胆に描かれるピーター、時には表情、時には体全体のしぐさで、どんなにくちぶえが吹きたいのか、子どもなりの、子どもらしくそのきっかけをつかもうとする「必死」が、キーツの絵で、間違いなく子どもたちの、子どもらしさに伝わってくるように思えます。

子どもという存在に出会って、子どもという存在をキーツが描く時、大人になってしまったキーツではあるのですが、その子どもはキーツの中で生きつづけていて、「ピーターのくちぶえ」という絵本となったのだと思われます。



ピーターの家族に赤ちゃんが加わることになりました。「一人っ子」であった世界が、そのたった一人が加わることによって、激変するのが赤ちゃんの誕生です。激変すると言っても、大人、両親にとっては、極々自然に、家族が一人増えることに過ぎませんが、一人っ子だったピーターにとってもそうとは行きませんでした。

キーツは、そんな子どもの世界と大人の世界の違いを、身近な「道具」をきっかけにして、ピーターの、子どもの心の動きに寄り添うようにして、描いて行きます。ただし、ピーターにとって変化は激変であるのは間違いありません。身近な自分のものだった道具が妹のスージーのものになって行くのですから。たとえば、表紙のピーターの後姿、小さなピーターのいすは、そのことを暗示しています。そんな後姿一つで、これから始まる物語について、そして物語の展開の中で、起こってることと、一人の子ども、ピーターの向合い方が、遂には、一人っ子が、二人の子であることを、納得される、伏線になります。

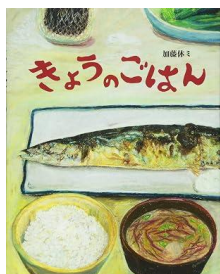
たぶん、こんな絵本の構成が可能になるのは、子どもというものについて、子どもという存在、その人格について、どんな意味でも軽んじることも、おびやかすこともあってはならないとするキーツの確信が背景になっていると考えられます。

「さあ、体を覆うものを取り、長く閉まっていた戸を開けて、新しい本、すばらしい本、真実で鼓舞してくれる本を、あらゆる子どもたちに与えましょう」



絵本とともに

～絵本とともに、子どもと歩む日々～



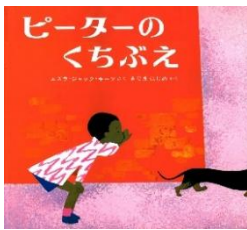
「秋」…。おいしいものがたくさんですね。私が思う秋のおいしいものは、何と言っても秋刀魚でしょうか。こんがり焼けた秋刀魚に、ほくほくのさつまいもが入ったお芋ご飯、最高の秋の定食です。さてさて、9月のまち食堂では、「きょうのごはん」（著・画：加藤休ミ／偕成社、2012年）を読ませていただきました。表紙には、おいしそうに焼けた秋刀魚の絵がどーんと描かれています。この表紙絵を見るだけで「こんなに上手に焼くのも難しいのよね」「まだまだ高い、10月まで待とうかな。」っと、秋刀魚談議は続きます。この絵本は秋刀魚を皮切りに、いろいろな家庭の「きょうのごはん」が登場するのです。カレーライス、オムライス、コロッケ、お寿司…どれもこれも、本当においしそうに描かれていて、ページをめくるたびに「わぁ」っと心が躍ります。食欲の秋を絵本でも楽しむことができました。



ある日のこうどうぶんこでは、「まんげつのはるまでまちなさい」（作：マーガレット・ワイズ・ブラウン、画：ガース・ウイリアムズ、訳：松岡享子／ペンギン社、2018年）を読んでいただきました。いつか読んだことがあるこの絵本ですが、数年ぶりに読み返したこの絵本は、強く胸にさりました。「ぼく、おもてへいってよるをみたい」「いまはだめ。まんげつになるまでまちなさい」「ぼく、ふくろうに あいたい」「まだよ。まんげつになるまで まちなさい」と、このように主人公のあらいぐまのぼうやは、お母さんの言いつけを守って待ちました。そして、母親が定めたその「とき」が来たとき、男の子へと成長したぼうやは、満月の夜へと出ていくのです。子育てをしていると、ごはんを一人で食べさせるその「とき」、歯磨きを自分でやらせるその「とき」、子どもだけで出かけさせるその「とき」が、いくつもいくつもあるのですが、そんな数々の「とき」が思い浮かんできて、このお話が胸にささった「とき」だったのかもしれません。

「ピーターのくちぶえ」

(作・画：エズラ・ジャック・キーツ、訳：木島 始／偕成社、1974 年)



私は大人になってからずいぶんの時間経っているので、子どものやることや考えていることの全部が分かるわけではありません。でも、子育てを続けていると「こんな動きをするの、好きだよなあ。」とか「きっと、次はこうするぞ。」と、予想することが少しだけできるようになりました。

この絵本の主人公ピーターは、口笛がうまく吹けない時、ぐるぐる回ります。お父さんの帽子をかぶりお父さんになったふりをします。自分のかげぼうしから逃げ出そうとかけ出します。そう、こんな風に遊びながらいつでも頭の中は口笛を吹くことでいっぱいなのです。そしてとうとう口笛が吹けるようになると、お父さんとお母さんにさっそく披露して、買い物へ行く道中口笛の吹きどおしなのです。

ピーターの、「口笛を吹けるようになりたい!」という気持ち。どんな時でも（おもちゃがなくなつて、ひとりだつて）遊んじゃうところ。口笛が吹けるようになってお父さんとお母さんに一番に聞いてもらおうところ。吹けるようになった口笛を何度も何度も吹いているところ...「分かる分かる! きっと、自分の息子ならそうする!」っと、思うところがたくさんありました。同時に、なんて子どもに寄り添った絵本だろうと思いました。子どもたちがこのお話を聞いたら（読んだら）、ずっと、お話の世界に引き込まれていくのだらうと思います。ちなみに、我が息子はこのお話を聞いている間、ずっと口笛の吹きどおしでした。

「ぼくのいぬがまいごです!」

(作・画：エズラ・ジャック・キーツ、パット・シェール、訳：さくまゆみこ／徳間書店、2000 年)

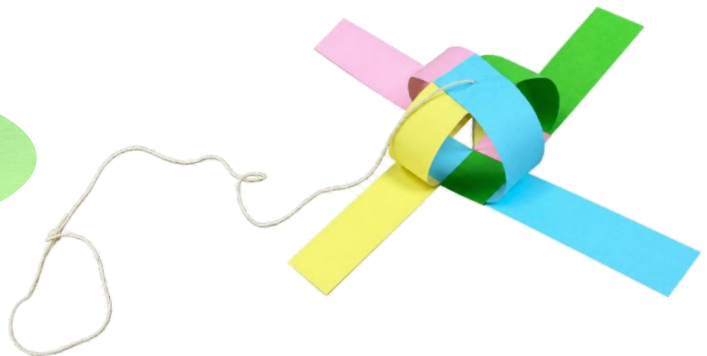


舞台はニューヨーク。プエルトリコから引っ越してきたばかりのホワニートは、スペイン語しか話せません。そんな中、どうにかして迷子になった飼い犬を探そうとします。「ぼくのいぬがまいごです」と書いた紙を片手に、身振り手振りで、飼い犬を探し始めると...

言葉も通じない街で、飼い犬を探し始めるという大冒険。「はじめの一步」の勇気を主人公のホワニートがふみ出すことによって、出会った子どもたちに助けられていくのです。子どもたちが力を出し合って飼い犬を見つけようとする様子には、何度も「なるほど!」と関心させられました。この本では、いくつか出てくるスペイン語の響きも楽しむことができますよ。

今月のつくて!あそぼう!

くるくる回る
かざぐるま



【材料】

- ・ 画用紙（2. 5 cm 幅 × 2 7 cm） 8 本
- ・ たこ糸
- ・ はさみ
- ・ のり
- ・ キリ

【つくり方】

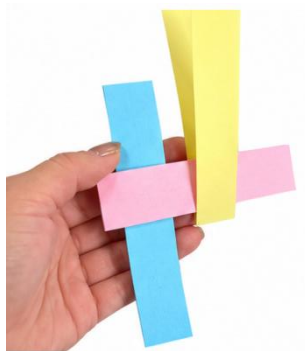
①まず、4本を使います。全部を、1枚ずつ半分に折ります。



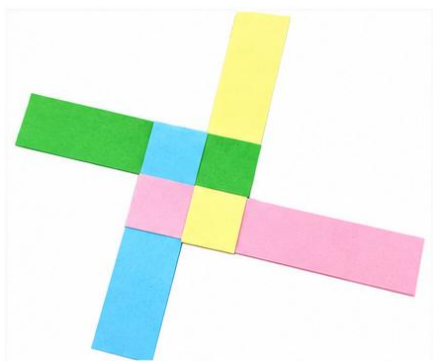
②折った画用紙のふたつを組み合わせ、次は、下からはさむ。

最後は、横から挟んで、隙間に入れる。

ぎゅっと中央に集めてね。



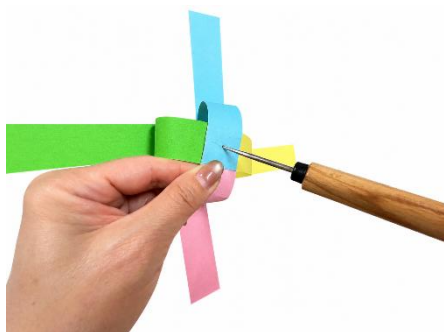
③集めたら、画用紙の端を1枚ずつ、のりで貼ります。



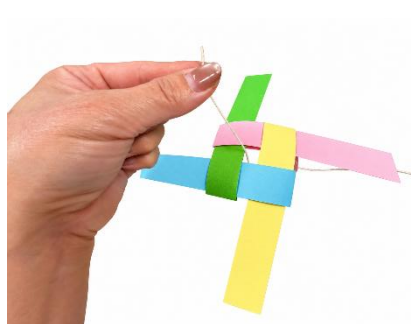
④4色を順番に1枚ずつ、くっつけたら、これを2つ、作ってね。



⑤真ん中に、キリで穴を開けて、たこ糸を通す。
画用紙のすき間を少しあけて、糸を通す。



⑥次に、2つ目のがざぐるまに、糸の先を通して、抜けないように結んでね。
持ち手の輪っかをつります。



完成～！

かぜに当てると、爆速でまわるよ！

今月のわらべうた

♪てあそび

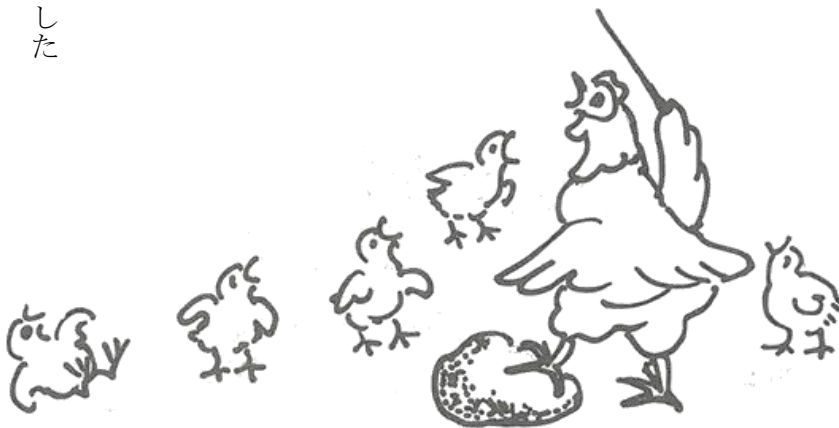
一わのにわとり さんぽして 大きな石にぶつかって
コケコッコーとなきました

二わのにわとり さんぽして 大きな石にぶつかって
コケコッコー コケコッコーとなきました

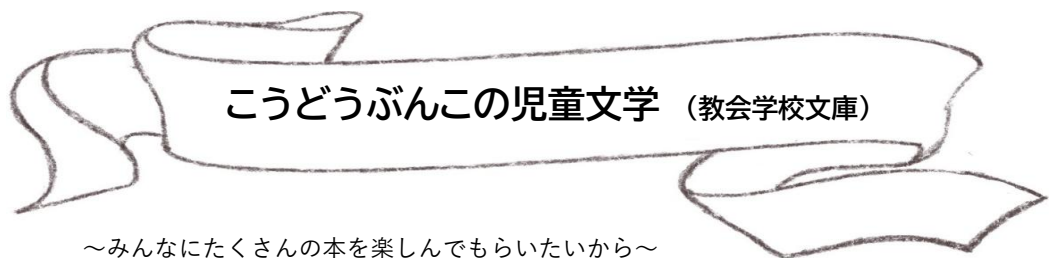
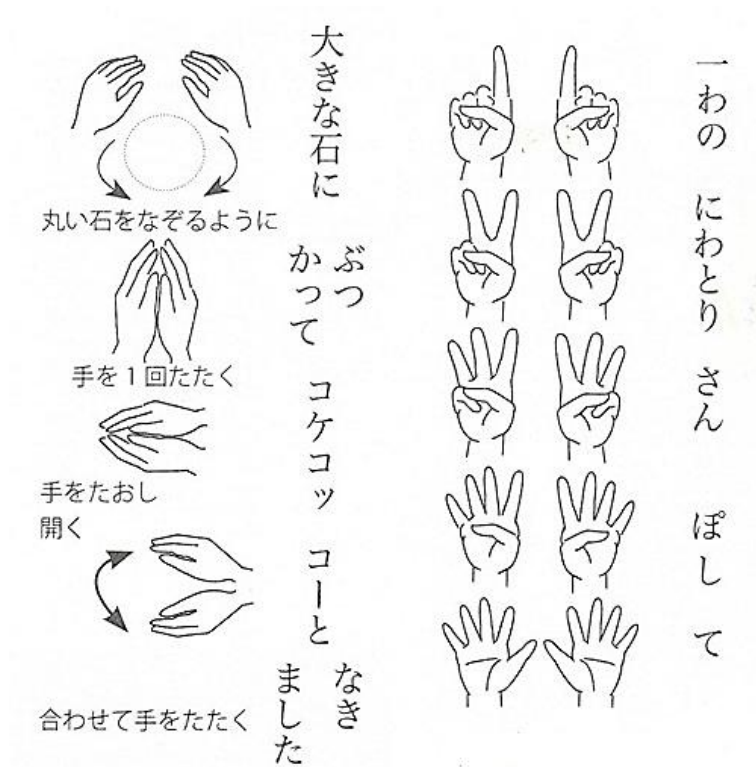
三わのにわとり さんぽして 大きな石にぶつかって
コケコッコー コケコッコー コケコッコーとなきました

四わのにわとり さんぽして 大きな石にぶつかって コケコッコー
コケコッコー コケコッコー コケコッコーとなきました

五わのにわとり さんぽして 大きな石にぶつかって コケコッコー
コケコッコー コケコッコー コケコッコー コケコッコーとなきました



「おはなしのろうそく 31」(東京子ども図書館編)より



「ハヤ号セイ川をいく」

(作：フィリパ・ピアス、画：エドワード・アーディゾーニ、訳：原田 勝／岩波書店、2026 年)



40 年近く前になりますが、「第 4 回環太平洋児童文学会議」（1993 年）が京都であり、こぐま社の佐藤英和さんの計らいで参加者の 1 人として潜り込ませてもらうことになりました。

その頃、「愛読」「ファン」だったバージニア・ハミルトンも、主題講演者の 1 人で交流会の時に「サイン」をしてもらったりしました。

そのことを調べていて見つかったのが、「1986年子どもの本世界大会／第20回 IBBY 東京大会」の報告書です。それをめくって、目に留まったのが、フィリパ・ピアスの講演「ある作家の見解」の記録です。

ピアスは、児童文学を読み始めたころから、「愛読」「ファン」で、ピアスの作品で日本語になっているものは、目に入り、入手できる限り読んでいました。

「トムは真夜中の庭で」(画：スーザン・アインツィッヒ、訳：高杉一郎／岩波書店、1967年)

「サティンの入江のなぞ」(画：シャーロット・ヴォーグ、訳：高杉一郎／岩波書店、1986年)

「まぼろしの小さい犬」(画：アントニー・メイトランド、訳：猪熊葉子／岩波書店、1989年)

「真夜中のパーティ」(訳：猪熊葉子／岩波書店、2000年)

「幽霊を見た10の話」(画：ジャネット・アーチャー、訳：高杉一郎／岩波書店、1984年)

そして、「ハヤ号セイ川をいく」などです。

なぜ、ピアスだったのか。

面白かったからです。

そのフィリパ・ピアスの「ハヤ号セイ川をいく」が、新しい訳で発行されているのを、近くの本屋で見つけ、40年ぶりに読み返すことになりました。

同じように40年ぶりに、「1986年子どもの本世界大会／第20回 IBBY 東京大会」で配布された資料でピアスの主題講演の記録も読み返すことになりました。児童文学の作家として「なぜ書くか？なぜ読むか？」で始まる文章は、児童・子どもたちの「読む」ことの意味と重要さ、だから、子どもたちがそこにたどり着くまでの道筋について、ピアスの果て、果たしてきた、あるいは歩んできたことを元に語るそんな内容でした。

その「道筋」が、ピアスにとってはストーリーテリング・語りでした。間違いなく夢中になるストーリーテリング・語りが、読み聞かせが、子どもたちを育てることを体験として語る、そんな内容です。

「ストーリーテリング・語り」や「読み聞かせ」で語ることで、そこから子どもたちの読むことが始まります。

何を読むかについて。こんなことをピアスは言っています。「私たちはときどき、本を読んでいる子どもたちが浮かべる、驚異や、歓びや、深く没頭している表情を、実際にこの目で、まざまざと見ることがあります。」そのようにして子どもたちの選ぶ本について、ドロシー・バトラーの言葉を紹介しています。「誠実でよい本、悲しみに満ちた本ならばすべて、人生には光ばかりでなく影もある、笑いばかりでなく悲しみもあると、誰にでもわからせる力を秘めているもの…。」

およそ40年ぶりにピアスの「ハヤ号セイ川をいく」を読み返すことになりました。

こうどうぶんこ によこそ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」(著：石井桃子／岩波書店、1965 年)に促されるように、教会礼拝堂の隅っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始まりました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなのです。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によこそ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年より毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、なぞなど、言葉であそぶ時間です。

3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

4、貸出期間

2 週間

5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp





こうどうぶんこ



日時：毎週水曜日 15 時～16 時 45 分

場所：ぶんこの部屋（西宮公同教会付属 西宮公同幼稚園）



November 11 2026

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3 文化の日	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 勤労感謝の日	24	25	26	27	28
29	30					

December 12 2026

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きに
なりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤